

グローバル化のもとで 中国人の名を日本語でどう呼ぶべきか

森 田 浩 一

How Should We Pronounce Names of Chinese in Japanese Under Globalization?

MORITA Koichi

Abstract : Names of Chinese people and places have been pronounced according to the local reading of the Chinese characters in each country/area and in each era in the East Asian cultural sphere. Therefore the author contends that Japanese speakers should pronounce the names of Chinese people and places written in Chinese characters with the Japanese readings of Chinese characters. The author also suggests that although in English, a global language, the names of Chinese people and places are pronounced by approximating the sound of the original Chinese pronunciations, Japanese speakers should recognize them as English loan words from Chinese, rather than Chinese words.

Key Words : the name of Chinese people, the name of Chinese places, katakanization of Chinese word, globalization, Chinese character, the East Asian culture sphere

要旨 : 東アジアには、漢字という表意文字の力によって、時空を超えて漢字圏が存在してきた。中国の人名・地名は、この漢字圏においては、それぞれの地域の、その時代の漢字音で発音されればそれでよい。それゆえ、日本語に漢字語として取り込まれた中国の人名・地名は、日本漢字音で読まれるべきである。そして、グローバル化が進む世界の主要言語である英語では、中国の人名・地名が英語なりの中国語近似音で取り込まれているが、日本語話者は、英語の中に取り込まれた中国の人名・地名を中国語ではなく英語として認識する姿勢を持つべきである。

キーワード : 中国人の名、中国の地名、中国語のカタカナ表記、グローバル化、漢字、漢字圏

はじめに

海外との交流が盛んな世の中になり、様々なことばの使い手が集まる場で、中国人の名前はいかに発音されるべきかという話題になることがある。

そして、「中国の国家主席の習近平氏の名前を『しゅうきんぺい』と発音しても、中国人にも通じず、英語話者にも通じない。日本の漢字音で言ったのでは、今のグローバル社会では通じず、国際性もない」というような意見を耳にしたりもする¹⁾。

日本は早くに漢字を輸入し、それが今や日本語という国語のなかで欠かすことができない存在にまでなった。人の移動が盛んではなく、実際に中国人などの外国人と交流する機会が多くなかった時代なら、日本に住む者達は自分の世界の中で完結し、中国人の人名・地名も自分達の好きなように読めば事足り、何の問題もなかったわけだが、昨今のようなグローバル社会になると、そうもいかなくなり、このような会話が耳にされるようになっ

たということなのだろう。

本論では、現代社会において、日本語の世界のなかで暮らす我々が、いかに現代中国語の音に向かうべきかという問題と、それにしばしば関連づけて語られる国際性ということについて、いささかの整理を行ってみたいと思う²⁾。

時空を超える漢字と漢字圏

日本は、近代化の過程で、初期には西洋からの外国語を音訳せずに漢字語化して吸収した。“economy”を経済と訳した如くである。そういった日本製漢語が本家の中国に逆輸入され、今の中国語の中で大活躍していることはよく知られていることである。

仮名という、表音文字をもった日本において、それでもなお、まずは漢字語へと向かう志向が働いたのは、漢字が長い年月を経て日本の文化において如何に堅固な根を下ろしたかということをおぼろげに思わせて印象深い現象である。また、新たな概念を翻訳しようとするとき、それまで外来文化摂取という格闘に使ってきた武器である漢字語に抛らざるをえなかったというふうにも考えても興味深い。やまとことばは、ついにそのような武器として日本人の前に現れなかったのである。

漢字との抜き差しならぬ関係といえ、日本人の名前自体がそうであった。名前の最も基本的な登録資料である戸籍には、いまだに名前の読みは記録されず、主に漢字によって記される氏名がどう書かれるのかということだけが記されるのであって、日本人にとって、名とは正に書かれるものとしての字が大事、そして、その字とは真名、漢字が中心なのであった³⁾。

自分がいかに人から呼ばれるか、名前というものは自己のアイデンティティと関って、とても重要なものである。しかしながら、ここ日本にあっては、「広島」さんなのか「廣島」さんなのか、普通の「高」なのか梯子高なのかという漢字の一画一画に注意した、いかに書かれるかという点に敏感な人が少なくないことが思いあわされて興味深い。

さて、それでは漢字の本家本元である中国の住人たちは名前についてどう考えているのだろうか。

中国では、かなり古い時代に漢字が発明された。甲骨文字は、少なくとも紀元前10世紀頃までに逆上ることができる。そして、当初、漢字の字形は各地域で異なっていたが、やがて秦始皇帝による中国の大一統の中で、文字の統一が行われ、秦の字形に収束することになる。

『史記』巻六、秦始皇本紀に、「法度衡石丈尺を一にし、車は軌を同じくし、書は文字を同じくす」とある。統一された大帝国の施政として、まず行われたのが度量衡の統一、交通規格の統一、文字の統一であった。

この書体の統一によって、戦国時代に各地で異なっていた字形がそろえられ、各地の間での意思疎通がおおいに便利になった。これはまさしく、当時の中華圏においてグローバル化が起こったということである。もちろん、今に言うグローバル化と違い、それは地球規模で発生したことはなかったが、当時の世界観から言えば、秦という世界の中心から、それまでの分裂状態にあった中国文明地域に一種のグローバル化という波が押し寄せたと比喩的に言ってもよい。

ここから見えてくるのは、伝統的に言われる漢字の三要素である形義音、すなわち字形、意味、発音のうち、形の統一だけに重点が置かれ、現代人のグローバル化という感覚からすればとても重要な、口頭によるコミュニケーションの便をはかるための「音」の統一は見向きもされていないように見えるということだ。これは、漢字という非常に便利な文字が表音文字ではなく表意文字であることと大きく関係する。

表意文字と簡単に記したが、漢字もちろん、その時、その場所での音と結びついている。しかし、その特性として、字の形を見れば意味(義)が自ずと了解されるという特性がまず重要なのであればこそ、表意文字と簡単に言えるのであった。秦始皇帝の文字統一から見えてくるのも、そこで重要視されたのが漢字の字形によって意味を表すという表意文字としての特性だということである。

もっとも、字体だけが統一され、筆談だけによって行政のすべてが行われるわけにはいかず、ことばの音の統一、かつて中国で“官話”とよばれた、行政組織を中心に使われる口頭での標準語そして標準音がそれぞれの時代に要請されたことは勿論ある。しかし、音の統一ということが漢字の世界で大きく立ち現れるのは、近代以降

になって、国語・標準語を制定する必要が生じてからのことであった。

字形が統一され、音の地域差は残された。これがその後今に至るまでの中国での言語に関する感覚を形作った。漢字でことばを記せば、どの方言話者であっても基本的な意思疎通ができるという感覚であり、その感覚は中国語圏内のみならず、日本や朝鮮といった中国語圏の外縁に広がる漢字圏にあっても広がり共有された。それゆえ、この漢字圏内にあつては、同じ漢字で書き表されることばであっても、場所が違えば音は違って当たり前であるという認識が共有される。日本の訓読（やまとことばによる意味を当てた読み）でさえ、実際には日本という一地方の漢字音として把握されればそれで十分であった。

この感覚が、人名や地名といった固有名詞に関しても同様に働く。例えば、毛沢東という名前が彼の生まれ故郷である湖南ではどう発音され、北京でどう発音され、上海ではどう発音されようと、その音の差は名としての本質に影響を与えるものではない。「毛沢東」という字で記されることが、その名の本質なのであり、日本語音で「もうたくとう」と呼ばれることは自然なことであった。

そして、漢字で書かれる日本人の名前、たとえば訓読みされる「森田」（もりた）という名も、北京なら北京での音読みがなされれば十分なのだ。漢字が波及し普及した地域にあつて、その名前が漢字で書かれるのであれば、読みは様々な現地音に任せればよい。人名のみならず、地名にあつてもそうであった。先に触れた、日本の戸籍での名前の取り扱い、まさにこの原則に従っているとも言える。

このように、漢字圏においては、それが成り立ってきた古代より、書けばわかるというコミュニケーションツールである漢字によって、「音」に由らない意思疎通のありかたが確立した。これは漢字圏という漢字を中心としたグローバルな圏ができあがっていたということなのだ。

インターナショナル（国際的）ということが、国家間、文化間についてということばであるなら、グローバル化とは、多くの文化が一つの文明に収束していく現象について語られることばである。漢字は、国、地域、文化の差を超えて、グローバルな文明圏を実現する力となった。勿論、それは東アジアという、今からみれば限定された地域で、しかも書面語という、ことばの限定的な一面においてのことであったが。

そして、古代よりの漢字圏に思いを致す時、強く感じられるのは、漢字によって単に空間としてのグローバル化が行われたというのではないということだ。始皇帝は、自分が統一した秦という世界が永遠に続くことを想定し、最初の皇帝「始皇帝」と名乗った⁴⁾。実際には二世皇帝で潰えてしまうことになるこの想定は、しかしながら、かれが統一した漢字が長い生命を得て今に続き、時間を超えて、今のわれわれをも彼の時より続く漢字圏に置く。古代の中国語、日本語の発音がどうであったかも気にならない。漢字で記されたことばは、今の音で読まれればそれでことばとしての命を保っているのである。グローバルというだけではなく、漢字は時間も超えて働いているのである⁵⁾。

音声中心の現代のグローバル化

さて、現在進行しているグローバル化の中では、名前に人々はどのような感覚を持つようになったのだろうか。

現代社会のことばの面でのグローバル化とは、英語が世界の共通語、主要なことばとして力を持ったということに他ならない。そして、そこでの我々のコミュニケーションのあり方は、口頭でのものが第一の地位を占めるようになった。人の移動が盛んになり、実際に会って話をする場面が増えた。そして、電話を始めとする音声伝達技術、ひいては音声記録技術が発達し、字だけではなく、音も保存できるようになった。さらには、そこでの共通言語である英語は、ローマ字という表音文字によって書き記されることばであった。このように、今、ことばの「音」の存在感がますます増している。

その結果、名前に対する感覚でも、どう呼ばれるかということ、その「音」が重要になった。

元来、英語の後背地である西洋の人名や地名は、その由って来た所、あるいは発音の差によって、もともと同一のものであつても、異なった音、異なった綴りとなる現象が多々見られる。

例えば、英語では“Michael”と綴られ、発音される名がフランス語では“Mishel”となり、ロシア語では“Mikhail”（ローマ字化すれば）となるように。また、英語で“London”と綴られる地名が、フランス語では“Londre”と綴られ、違ったように発音される。

表音文字によって書き表されるため、それぞれの音の違いを、それぞれの書記のシステムによって記さねばならず、このような分化が起こりやすいのである。

近代国家が成立し、ことばが国語となるにつて、この分化はさらに確固たるものとなる傾向を持つ。かくして西洋のことばの世界にあっては、その音の差、表記(綴り)の差が、国家ひいては文化を分断するベクトルとして働いた。

その一方で、英語という優勢言語によるグローバル化がその世界を覆い始めている。古代の漢字圏グローバル化が、漢字という形に重きを置いた字によるもので、それぞれのことばの音の差は問題としなかったこととの差はまことに興味深い。

さて、戸籍に名前の読みを登録することさえない、漢字圏の模範生といえる日本にあって、この「音」重視の現代のグローバル化が押し寄せ、人々の意識を変えている。元来、漢字という「真名」に次ぐものとして意識されてきた「仮名」が「音」の世界で強さを増した。押し寄せる外来語はもはや漢字語のスキームによらず、カタカナ語として音写される。「森田」は「もりた」であり、「Morita」は違和感なくとも、中国語標準語音で“Sēntián”⁶⁾と呼ばれることは奇妙だという感覚になっている。

そして、事を複雑化しているのは、漢字圏グローバル化を経てきた地域に、「音」中心のグローバル化が押し寄せてきた二重構造であり、そのために漢字で書かれた名前をいかに読むべきか、表音文字でいかに書くべきかという問題意識が発生することになる。

昔からの漢字圏グローバル化の世界での「字」中心主義の流儀なら、「森田」と書かれることが重要で、その読みの地域差は重要ではない。しかし、ここに「音」中心の文明が押し寄せた。中国においても、英語に堪能な職員が多数を占める欧米系のホテルなどでは、“Sēntián Xiānshēng”(森田先生、森田さんの意)と呼ぶよりは、“Mr. Morita”と呼ぶことのほうが多くなった。

もっとも、中国においても、グローバル化が進む前から、実際のコミュニケーション、文化的接触のあり方によっては「音」が重視されることがあったことにここで触れておこう。

例として、古い時代のことであれば、仏教が中国に入ったときの状況がある。中国文明にとって、仏教という巨大な宗教・思想体系との出会いは大きな衝撃であり、仏典のことばは、音訳されることがあった。その後も五種不翻といった考えから、敢えて音訳のままのことばを残し、意識されなかったということもある⁷⁾。一方で、その思想が噛み砕かれ、中国の血肉となっていく過程においては、梵語も意識された。仏教との出会いの衝撃が音訳を選ばせ、時を経つつ漢字圏グローバル化の公式に則った意識も起こっていったのである。「般若」が梵語の音訳であり、その意識が「慧」であるというような例がこれである。

また、近代においては、中国人と外国人が実際に出会っての接触、交流が生じる中での例がある。たとえば、魯迅の場合を挙げてみよう。魯迅は日本に留学し、日本語を解した。彼の友人内山完造は、日本語でのコミュニケーションにおいては、「うちやまかんぞう」と呼ぶ相手であり、中国語(標準語)での場合には、“Nèishān Wánzào”と呼ぶ相手であった。

しかし、こういった関係で、双方が双方のことばが理解できれば、ことばの間での越境が起こる。時に魯迅は内山のことを“鄔其山”と書き記すことがあった。(“辛未初春、書鄔其山人仁兄教正。”⁸⁾)“鄔其山”(“Wūqíshān”)の“鄔其”は日本語の「うち」の音写で、“山”は字のままであるが、ここには魯迅が“Nèishān”ではなく、「うちやま」と呼ぼうとしている姿勢があらわれている。それが完全な音写にならず、万葉仮名のような混成した構造になっているのは面白いことだが。

さて、話を今に戻そう。

隣国韓国にあっては、表音文字(しかも音素を超えた厳格なまでのもの)のハングル使用への傾斜、漢字使用の減少によって、「音」の重要性が増した。そして、その結果、日本の人名・地名が韓国では日本語の近似音で呼ばれるのと釣り合いを持たせるため、ついに漢字圏の仲間である日本においても、韓国の人名・地名は日本語の発音体系の中で韓国語に近似したもので呼ばれるように要請され、実行された。

また、漢字圏の中にあっても、越南(ベトナム)では、フランス植民地時代を経て、ベトナム語のローマ字表記(クオック・ゲー)が普及した。彼の地で多く見られる「阮」という姓も、“Nguyễn”となり、「音」が重要となって、日本においても「グエン」と記され、呼ばれるようになった。

しかしながら、韓国語であっても、ベトナム語であっても、それが漢字で書き表すことが可能なことばであれば、今でも中国では中国音で発音している。

例えば、朴槿恵大統領の名は、今の日本にあっては、「ぱくきんけい」と呼ばず、「ぱくくね」と現地音風に呼ぶのだが、中国では相変わらず“Piáo Jinhui”であり、互いに相手の名を現地音に近く発音するという相互尊重の気風は成り立っていない。漢字しかない中国にあっては、古来よりの漢字圏にある相手に対しては、我が漢字音で呼ぶより他ないのだ。

ここで、韓国の地名について触れておこう。ソウルという漢字で書き表せない地名について、以前は“漢城”という漢字名を中国では用いていたが、今では韓国の要請により、“首爾”(Shǒu'ěr)という中国標準語音で読めば、ソウルに近い音となる名称へと変更された⁹⁾。漢字圏の仲間がいかに「音」重視に変わろうと、中国に漢字しかない状況が続くかぎり、「音」を写した漢字を中国人は自分の現地音で読むという漢字圏の姿勢は崩れないということになる。当たり前のことだが、どんなことばも中国では漢字で書かれるより他なく、中国音で読まれるしかないのだ。

一方、表音文字を持った漢字圏の仲間は、英語などから入る外来語を、その表音文字で似せて表記することができ、そのため、現代中国語音についても、その今の音に似せて発音し表記するのか、あるいは、漢字圏の伝統的なグローバルな手法である我が漢字音で読むのかという問題が発生することになる。

このような中国と他の漢字圏内の国との間に生じる現象は、一見不公平に見える。

しかし、繰り返すが、中国では仮名やハングルのような表音文字がなく、外来語は意識するか、音を写す場合でも“鄔其山”や“首爾”のような方法しかなく、漢字によって摸写される音は原音とかなり違ったものにならざるをえない。結局、中国語の性質ゆえに、中国には昔ながらのやり方でやってもらうのが合理的ということになるのだ。

そもそも、漢字圏以外の地域の人名・地名にしても、中国語はすべて漢字表記で自分の中に取り込むしかない。オバマ大統領は“奧巴馬 (Àobāmā)”だ。中国語には声調もあり、「ギョエテとは俺のことかとゲエテ言い」以上の奇妙さであるが、もちろん、アメリカがこれに抗議するという事などないのも、中国語ということばの性質ゆえなのである。

さて、韓国は日本に対しては韓国の人名を韓国語の音に近く呼ぶように要請しながら、一方で中国に対してはそうではないということに対して、何かしら政治的な反応をする人が見受けられるが、以上見てきたように、中国に対しては、漢字を放棄しろとでも言わぬかぎりはこうするよりないのである。どうしても、ということになれば、“奧巴馬”(オバマ)や“鄔其山”(内山)のような表記を中国に要請するよりないが、それではまだまだ名前について漢字重視の気風が残る韓国では受け入れがたいであろう。結局、お互い、表音文字をもっているが故に日韓間では「音」重視の要請も起こりえるということではしかない¹⁰⁾。

習近平はどう呼ぶべきなのか

漢字と人名を巡って、その事情を一通り眺めてきたところで冒頭の話に戻ることにしよう。

現在のグローバル化が進んだ世界の中で、日本語は中国の「名」にどう向かい合うべきなのだろうか。グローバル化に合わせるため、そして、英語話者との意思疎通が円滑に進むために、日本漢字音で呼ぶのはやめて、現代中国語標準語音で呼ぶべきなのだろうか。

人の移動が盛んになり、直接的な口頭のコミュニケーションが交わされる現代のグローバル化が進む一方、東アジアにあっては、漢字という文字を核にしたグローバルな漢字圏が古来より存在してきた。漢字で書かれた名をどう読むべきかという問題は、その二つのグローバル化が重なって存在するがゆえに起こっている。どちらのグローバル化のあり方を我々は尊重すべきなのか。

中国からの観光客が日本を訪れ、標識や駅名、店名に漢字が使われているために、とても便利であると感じたという話はよく耳にする。今では彼我の漢字の字体には若干の差があるようになってはいるが、それでも、漢字は見れば理解できるという特長を発揮し続けている。このような漢字の有用性を思えば、今のグローバル化だけを尊重して音を重視するあまり、中国の人名・地名を現代中国語音で呼び、それを仮名書きだけで記すというや

り方は取るべきではない。

また、地名で考えてみれば、“首爾”にしる、“大阪”にしる、漢字圏の国が自分の地名の漢字表記を自分の意志で決めているのもとても大事な点だ。漢字という書かれ方だけが重要な字によって表されるため、名が漢字圏内では異なった国においても同じ字で書かれることで、名のアイデンティティが確立する。中国の漢字を中心に漢字圏という一種のグローバル化が進んだとここまで表現してきたが、見方を変えれば、極めて「国際的」に公平なシステムであるともいえる。“London”と“Londre”のような例を思い返されたい。

第十二回国際連盟地名標準化会議(UNCSGN)のワーキングペーパー No.4を読むと、非ローマ字言語とローマ字言語、また、ローマ字言語間の地名の標準化にどのような困難が立ちはだかっているかよく了解されるが、アルファベット言語間の問題として、フランス語で“Genève”と綴られるジュネーブという地名を英語話者はどう発音していいかわからない、原音を尊重して読めるようにするなら、英語では“Zhenaiiv”と綴らねばならないといった話が紹介されている。しかし、極端なたとえ話だが、ジュネーブを“日内瓦”と漢字表記し、英語なら英語風に、フランス語ならフランス語風に「訓読み」したとしたらどうだろうか。そこに広がる景色は、英語というアルファベット言語が優勢言語となって進むグローバル化とは違った、お互いに「公平な」国際化の姿が見えてくるのである¹¹⁾。

こういった漢字の有用性は、おおいに大事にすべきであり、漢字をうまく取り込んだ日本語の有りようは大事にすべきである。そして、漢字の有用性を遺憾なく発揮するためには、訪日した中国人が漢字で書かれた日本語の名を、日本語音で読む必要がないという、音が切り離された自在さを尊重しなければならない。我々もまた、中国のことばを中国語音で読まねばならないということはない。“四川”は「しせん」でよく、日本語の使い手が皆、その中国語音の“Sichuān”，あるいはその近似音が「すーちゅわん」のような音であると覚えたりする必要はないのである¹²⁾。

グローバル言語となった英語の話者が発音する中国の人名地名、それを理解するために、日本語の世界の中で中国現代語音の近似音で中国の人名地名を読んでおく必要はまったくない。中国の人名・地名にとどまらず、世界中の人名や地名が英語ということばの体系のなかでどのように発音され、どのように表記されるかは、「英語を学ぶ」というスタンスで相対すればいいだけのことだ。

今、ローマ字で中国の人名・地名を表記する際には、国際的に、中華人民共和国で制定された中国語ローマ字表記システム“拼音字母”(ピンイン)によることとなっている¹³⁾。したがって、習近平は英語の文書の中では“Xi Jinping”と書かれることになる。英語の綴りとしてこの“Xi”がどう発音されるかは、英語の話者達によって形成されていくことになる。そして、この綴りとその実際になされる発音は、英語を学ぶ中で理解していくしかない。中国人が発音する“Xi”と英語話者の“Xi”にずれがあるのは当然で、そうであれば英語を学ぶ姿勢の中に現代中国語音の理解を求めるのは負担が過ぎることになるだろう。“Al Pacino”が「あるばしーの」なのか「あるばちーの」なのかというレベルの話に、イタリア語学習までが要求されては話にならないのである。

それゆえ、グローバル社会の主要言語英語を学ぶ上で、日本語の中に取り込まれた中国の人名・地名を中国語音で読んでまでして備える必要はない。

そして、日中間での国際的(インターナショナル)な問題としては、日本の漢字語として意識されている中国の人名・地名を現地音で読む必要があるかといえ、繰り返しになるが、時空を超えたグローバル化社会である漢字圏のしきたりに則っておけばよいということになる。

中国の人名・地名表記で、日本語が漢字を捨て去り、仮名による中国音の近似表記に重心を置くようになってしまえば、自分の音で読めばわかるという漢字の時空を超えたグローバル化作用の恩恵がうけられなくなってしまふ。そして、その恩恵を十分に得るためには、「自分の音で読めば良い、相手は相手の音で読めばよい」という原則が重要なのだ。

日中間——インターナショナルな場では

最後に、現在の日本と中国という二国間交流という観点から、中国の人名・地名について述べておくことにしよう。

西洋から新しい事物とともにことばが流入してきたときに、音写によって、カタカナ語が大量に生まれた。それは、当時の日本人にとっては音写であって、自分の耳に聞こえた相手の近似音であり、もちろん日本語の音韻のなかで聞き取ったように定着するよりほかなかった。その時々、ミシンであったり、マシンであったり、音写の形を少し変えることで受け持つ意味に差を持たせる結果となった例さえもある。じっくりと落ちついて意識できないだけの、その事物との出会いの衝撃というものがカタカナ語には特に強く感じられる。

これだけ直接的な交流が増えた日中間にあっては、相手の社会・文化に強いインパクトを持って立ち現れる事物、人物が多く現れて不思議はない。

かつて、東芝や松下といった家電企業が中国に進出したころ、日本の会社名は中国では漢字圏のしきたり通りに中国語音で読まれた。しかし、今や、中国においても世界的ブランドとして日本の家電企業も、“Toshiba”や“Panasonic”であり、マツダ（松田）にしても、そのローマ字綴りの企業名である“mazda”を“馬自達”（Mǎzìdá）と音訳した中国語表記で掲げる時代になった。テレビに記された“Toshiba”というブランドは、いったいこの国の製品なのだろうと思う中国人も存在する時代なのである。

逆に、中国のブランド“華為”が日本で「ファーウェイ」と名乗るのも昨今のグローバル企業らしいことで、その名の重点は書かれる字ではなく、「音」である。新興の携帯電話企業である“小米”も日本での名は「シャオミ」だ。

古い漢字文化圏のグローバル化の範疇にとどまろうとせず、新しいインパクトを与えて、斬新な印象を与えるために、現代のグローバルブランドは、名前の「音」を大事にする。かれらが想定する世界、そして日本の顧客は、“華為”という字ではなく、「ファーウェイ」という音をともなったブランドに惹き付けられるだろうという判断がここにはあるだろう。

そして、チャン・ツイイー（“章子怡”）のような人物。この女優の名を漢字で書ける人は少なくとも、この名前の「音」を知る人は多い。

大量に流れ込んだ西洋からの外来語、人名のように、現代中国からの外来語や人名が「音」、そしてカタカナ語として怒濤の如く日本語のなかに流れ込んで来るとしたら、それは単なる渾沌ではない。二国間の文化交流が盛んになったなら、当然そうなるはずの姿だ。そうした中で、チャン・ツイイーとはどういう漢字で書くのだろうか、中国語では、このチャンはどう発音されるのだろうか、中国へと思いを致す人々が増えるなら、それはこの二国間の「国際的」な状況においてはこの上もなく素晴らしいことなのである。そして、それは「グローバル化」ということとは実はあまり関らないのだ。

結 べ り に

東アジアには、漢字という文字によって、漢字圏という時空を超えたグローバルな世界が存在してきた。中国の人名・地名は、この漢字圏においては、それぞれの地域の、その時代の漢字音で発音されればそれでよい。そうであってこそ、古代から続く漢字圏が内包する文化を共有でき、恩恵を受けることができる。

一方で、現在進行するグローバル化がある。その主要言語である英語は、中国の人名・地名をそれなりに現地音に近い音で表そうとするが、それはあくまで英語風にてあって、中国音ではない。日本語話者が英語を学ぶ際には、英語で発音されるフランス人名を英語として学ばねばならないのと同様に、中国の人名・地名もその綴りと発音を学んでゆくより他はない。

国際社会で通用するためという目的で、日本語風の近似音で中国の人名・地名を呼んだとしても、それは中国人には通じない。そしてまた、英語の中での中国語近似音とも通じないのであり、無用な負担を日本語とその話者に強いることになる。

しかし、一方で、日本と中国との間で、人的交流がさらに盛んになり、お互いの文化、トレンドが刺激しあうようになれば、日本にはもっと中国の原音が溢れるようになり、そこから中国語由来のカタカナ語が生まれることになるだろう。やがてそこに、今の時代に生まれる漢字音——呉音、漢音、唐音につぐ、「新唐音」とでもいった音が生まれるとしたら、それは日本語として何とも豊穡な姿ではなかろうか¹⁴⁾。

注

- 1) たとえば、藤野彰「中国人名の現地読み——メディアの現状と課題」(『東方』366号, 2011年)に、「では、今後も将来にわたって『日本語読み』のままでいいのであろうか。筆者は、日本人(あるいは日本語のわかる人)の間でした通用しない『日本語読み』だけでは、時代のニーズに応えられない、と考える。アメリカ人も、インド人も、アフリカ人も『胡锦涛』を『Hu Jin tao(フー・チンタオ)』と呼んでいるのに、『こ・きんとう』という読み方しか知らないのでは、日進月歩の国際化と情報化に対応できないのではなかろうか。いくら英語が達者でも、頭の中に『こ・きんとう』としかインプットされていなければ、外国人とは話が通じない。『Who is Hu?』のシャレもわからない」とある。
- 2) 人名がいかにか呼ばれ、書かれるべきかということは、深くそれぞれの人物のアイデンティティに関することであり、基本的にはその人物がそう呼ばれることを望む我が名前というもののが尊重されねばならない。本論の論点はそのような個人とその名前の尊厳、あるいは国家・地域とそこに存在する地名の尊厳について照準を当てるものではないことを最初に断っておく。したがって、リアン・テルミ・ハタノが『マイノリティの名前はどのように扱われているのか—日本の公立学校におけるニューカマーの場合—』(ひつじ書房, 2009)で取り上げた、ブラジル人ペルー人ニューカマーの子ども達の名前が日本の学校での取り扱われ方の問題は敢えて触れていない。毛沢東が日本で「もうたくとう」と呼ばれるのを忌避せずとも、ここに王という姓の中国人がいて、かれが日本においては「ワン」と呼ばれたい、自分はそう呼ばれるべきだと考えているなら、われわれはそれを尊重しなければならないことは論を待たない。
- 3) 出生届には名前の読みをふりがなとして記す必要があるが、戸籍、住民票ともに読みは結局記されない。住民基本台帳を含めて、読みは基本的に副次的なものとして扱われている。戸籍法第一条、住民基本台帳法第七条で定める記載事項は、氏名のみでその読みは含まれないからである。
- 4) 『史記』巻六、秦始皇本紀、二十六年
- 5) 漢字の超時空性については、たとえば、陳章太「漢字と漢字文化の関係を略論する」(『漢字文化圏の歴史と未来』大修館書店, 1992年所収)などを参照。
- 6) 本論では中国語の発音は漢語拼音字母(ピンイン)によって記す。ピンインは、漢語拼音方案(1958年)によって基本的なカタチが定められた、ローマ字による現代中国標準語(“普通話”)の表記システムである。また、国際化標準機構によってISO 7098として採用されている。
- 7) 「唐玄奘法師明五種不翻。一秘密故不翻。陀羅尼是。二多含故不翻。如薄伽梵含六義故。三此無故不翻。如閻浮樹。四順古故不翻。如阿耨菩提。實可翻之。但摩騰已存梵音故。五生善故不翻。如般若尊重智慧輕淺。令人生敬。是故不翻。」(南宋・法雲編『翻訳名義集』、『大正新修大藏經』, No.2131, vol.54, 1057c 7-12)
- 8) 上海魯迅紀念館編『魯迅詩稿』, 上海人民美術出版社, 1961年
- 9) 2005年1月19日、当時ソウル市長であった李明博は記者会見を開き、ソウルの中国語名を「漢城」から「首爾」へ変えると発表した。(「ソウルの中国語表記『漢城』から『首爾』へ・ソウル市」日本経済新聞2005年1月19日)漢城は朝鮮自らが太祖李成桂によって漢陽を漢城と改名して誕生した名であったが、21世紀になりソウル市長自らが「音」を重視して改名することとなった。中国政府はこれを受け、同年10月には中国での表記を変更することを発表した。
- 10) 上掲藤野彰論文によると、「日本の主要メディアの中に現地読みの動きが出始めたのは、韓国の全斗煥大統領が韓国元首として初めて日本を公式訪問した一九八四年のことだ。訪日二カ月前の七月、当時の安倍外相が韓国人や中国人の名前を公式発表文書において現地音読みするように外務省に指示し、一部メディアがこれにならう形で韓国人の名前の現地読みに踏み切った。背景には韓国政府からの日本政府、メディアへの要望があった。言葉は悪いが、一種の『外圧』を受けての対応と言えなくもなく、結果的に多くのメディアが追随した」とある。
- 11) “WORKING PAPER No.4”, Group of Experts on Geographical names (Twelfth Session), 1986。今、国連の Statics Division のウェブページで見ることができる。(http://unstats.un.org/unsd/geoinfo/UNGEGN/docs/12th-gegn-docs/12th_gegn_WP4.pdf) (2016年12月1日確認)
- 12) 漢字からの脱却を進めた韓国にあつては、「音」のみによって中国の人名・地名に相対さねばならなくなっている。しかし、日本にあつてはそうではなく、引き続き漢字のインターナショナルに公平な有効性を享受できる点が異なっている。韓国の事情については、水野俊平「中国固有名詞の中国語音に対するハングル表記について」(明木茂夫『中国地名カタカナ表記の研究 教科書・地図帳・そして国語審議会』(東方書店, 2014年)所収)に簡便な説明がある。
- 13) アテネで開かれた第二回国際連盟地名標準化会議(UNCSSGN)に中華人民共和国が初めて参加し、中国の地名をローマ字表記するに当たっては、ピンインによることが決められた。(Resolution 8, “Romanization of Chinese geographical names”)この流れを受けて、現在国際的に中国の人名・地名はピンインによってローマナイズされることとなっている。これによって、各空港などで中国の地名がピンインによってアルファベット表記されていることはよく目にされていることだろう。なお、中華民国(台湾)ではピンインによらず、人名・地名のローマ字表記を巡って問題が生じることもある。
- 14) 漢音にせよ、呉音にせよ、漢字の標準的な読みは、古にあっては音博士による審音があり、今では文部科学省による標準化がある。一方、世間ではまちまちの読みもされていたわけで、そこからはこういった文化現象にも共通して見られる、エネルギーに溢れた渾沌に身を置く「民」と、それに標準化の網をかける「官」という構造が見えてくる。
現在の中国語音をいかに日本語の中に写し取るかという規範・標準作りの提案として、2011年には福嶋亮太、池田巧による「中国語音節表記ガイドライン」が世に問われた。(「中国語音節カタカナ表記ガイドラインについて」、『東方』364

号、2011年）両氏は、現在の民間音博士といえるだろう。

そして、今、「官」が定める学校教育の現場での、中国地名の読み方に関連する混乱や問題点については、明木茂夫『中国地名カタカナ表記の研究 教科書・地図帳・そして国語審議会』（東方書店、2014年）が詳細な研究結果をまとめている。